E71

中廊下型の宿泊施設を住居の離れとする用途転用計画

—伊豆アネックスプロジェクト—

Project that converts Pension with Inside passage into Annex in house

- IZU Annex Project -

西田　司（研究員）　深尾　精一（教授）
小泉　雅生（准教授）　田中　亮平（修士課程）
Osamu NISHIDA (Res. Assoc.), Seiichi FUKAO (Prof.)
Masao KOIZUMI (Assoc. Prof.) and Ryohei TANAKA (Master Course.)

ABSTRACT

The pension in the villa area in Izu-kogen is rebuilt. The building is a wooden pension of two stories of 25 years of old. The second floor part in this building is changed removing further. It is a further pillar, a beam, and a base of the part that used.

キーワード：減築　用途転用　リニューアルデザイン
Keywords: Decreasing construction, conversion, renewal design

１．計画概要

伊豆高原の別荘地にある、ペンションの改築計画である。既存建物は築２５年程の二階建ての木造ペンションで、今は運営されていない。この建物の二階部分を取り去り一層に減築し､住宅の離れに用途変更する。活用したのは一層部分の柱梁、そして基礎である。

建物の奥には庭があり、施主の趣味である家庭菜園が広がっている。新しい生活はその庭に面して繰り広げられ、丹誠込めてつくった野菜を味わい、時には人に振る舞うような場所。また、雅楽など趣味に没頭できる場所が求められた。

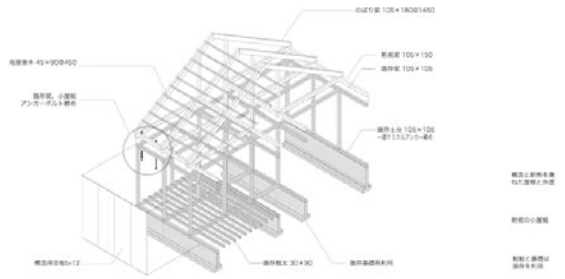
２．基本方針

施主が求めたのは「竈や囲炉裏、そして大きな土間のある、倉のような離れ。」限られた予算のなかで大きな面積や気積を実現するために、既存の柱梁と基礎を再利用することは早い段階で決まった。またペンション宿泊棟の既存中廊下部分を挟んでシンメトリーになっている平面構成を活かし、半分を内部空間、もう半分を屋根のかかる大きな半外部空間としている。結果２５坪を超える大きな半外部の土間空間や、土間をバッファにしつつ庭と対峙する弾力性のある内部空間が生まれた。また洋風ペンションの階高を利用した大きな気積など、新築では得られない空間的な広がりを手に入れることにつながった。

３．構法の提案

一階の柱と梁と基礎を残して、屋根、壁、間仕切りは全て撤去した。既存の柱と梁のサイズが１０５㎜角と細く、既存の梁に新規の梁を重ねて補強、その上に新たな小屋組を載せた。柱や梁は現しとし、建物の外側から構造用合板と断熱材で構成する厚さ１５０ー１８０㎜の外壁と屋根を一体とした皮膜を取り付け、建物の外周を一体的に固める事で構造を補強している。また、使用したサッシは全て木製サッシュのペアガラス（6-12-6）の仕様で、外周に巡らせた断熱材（グラスウール16K t=100）とともに建物を環境補強し高気密、

高断熱の空間を実現している。意匠的な面での改修と同時に現代住宅として相応しい住宅性能を持たせている。



４．新旧の扱い

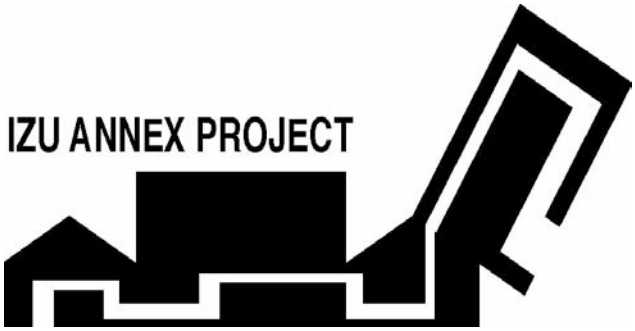
洋風ペンションの階高など、スケールは一般住宅としては大きなものだった。それに対して施主と共に飛騨高山で買い付けたのは、障子、板戸、欄間など模様も素材も異なる古い建具で、こちらは人が生活するためのスケールである。

今回、スペースとスペースの間仕切りや、開口部の位置に合わせて建具を使い、既存軸組のもつ洋風ペンションの大きなスケールと古い建具のもつ人間スケールのギャップはあえてすり合わせずに同居させるという設計手法をとった、いわゆる異種交配である。この事が逆にこの住宅を魅力あるものにしている。

既存の柱梁や古い建具、また新たに設えられた壁、床、天井などは空間の質に合わせて柿渋やウッドワックスなどで染色している。和と洋のスケール、内部と土間、新旧の素材が中和せずに混ざり合う空間。それは家具や野菜など、生活用品が溢れて使い込まれていくうちに深みを増す、弾力性のある空間である。

５．開口部

外周に現れている開口部は、内部のプログラムより、窓や換気口、出入口などの開口部の位置をプロットしたものが、ひとつながりの帯として表現されたものである。既存軸組のもつ洋風ペンションのスケールにあわせて全体を縫うように連続しており、それにより部屋という単位に文節された内部空間に不思議な連続性をもたらしている。



６．まとめ

洋風のペンションに対して、施主が求めた住居の離れとしての居住性。今回は既存建物を改築するという提案をしたが、通常であれば既存の建物を取り壊して建て直すというのが常識である。今回の提案は、結果としてそのような今日のスクラップアンドビルド的な考え方に対して疑問を投げかける事になった。既存の建物ストックに余剰があるような現在の状況で、たとえ必要とされていない建物であったとしても、利用可能な部分は利用し尽くす事を模索する、そのような建物の更新が今求められている。

□ 写真　田伏　博
□ 協力　大石雅之（修士課程）、沖野博史（修士課程）、古沢裕子（修士課程）、和久倫也（修士課程）、品川雅俊（学部生）

□ プロジェクトリリース
日経アーキテクチュア　2006年2月27日号
「ペンションを住宅の離れに改築するプロジェクト」